

季に至つては紡績工、交通労働、坑夫、化学工業等にも多くの争議が起つたが、依然として労資戦の中心は礦工、機械工業にあつたこと云つてよい。それと同時に、戦争の中心地域も亦た、工業の中心地たる大阪方面に移つたことは著しい事實である。

この間に、日本の労働組合が能く分量の上から見た實力以上の戦ひをし、資本家階級に其の政府の襲撃に對して能く善戦したことは特筆に値する事實である。けれども其れにも拘らず、日本の組合運動には、成然期に近づいた今日の資本主義に戦ふには、餘りに實力の足りないことが明かになつた。現に大正十一年中の闘ひによつて、多くの組合は致命的に傷ついた。有数の大組合が、忽ちにして有名無實の組合になつた實例すらもある。大正十一年の労働運動の特徴は、外に對しては悪戦苦闘を續けると同時に、現在の組合の實力に組織は、果して労働階級の戦闘機關たる所要を満たすに足るものであるか否うか云々を痛切に内省せしめたことである。

その結果として、組合の組織を整理しなければならぬといふ、漠然ながらも強い要求が組合運動の内部に起つて來た。東京に於ける機械工聯合会の成立の如きも、この要求の現はれに外ならぬ。全國組合總聯合の計畫が、幾多の難關に出會つたにも拘らず、創立大會の開催までに進んだのは、この要求の今一つの現はれである。創立大會は不幸にして決裂に終つたが、決裂の直接の動機が、

組合の組織に關する原則上の問題であつた事は、組合の組織に實質の問題が、意外に重要視せられてゐることを語つて居る。

大正九年以來の不況期に入ると共に、組合が分量的に發達することは極めて困難になつた。この組合運動の量的成長に一頓挫を生じたことは、やがて組合をして主として質の方面に注意を注がせることになつた。其結果として、此時まで組合運動に絡みついてゐた労働運動のプロカーミ如何はしい組合は、漸次に労働運動の地平線からかき消された。大正十一年の労働運動界は、一面から見れば尚ほ斯ような質の方面に重きをおく傾向の續きであつて、組合の組織に關する原則上の問題にぶつかつた時、此の傾向は極點に達したものである。

大正十一年は、まだ此問題を解決したまは云へぬ。そして大正十二年は、恐らく日本の組合運動の組織に實質の上、一大整理の行はれる時期である。總同盟の第十二回大會が、大正十二年を期して、所屬組合の産業別により改造を決議したことも注意に値する。それと同時に、大正十一年の経験は、組合の分量の方面が、決して閑却することの出来ないことを知らしめた。量の問題は或る程度を過ぎるに勢ひ質の問題に變化する。如何に良き質でも、或る分量だけになければ役に立たぬ。即ち量の問題は質の問題に變化するからである。大正十二年は組合の組織に實質を整理し